

詩 追憶のカイロ（10）

とよださなえ

カイロで過ごした経験のある読者のなかには、とよださんの詩が、ほのぼのとして暖かく、懐かしいカイロの情景を思い出させてくれると、喜んでくださり、次回を待っている方々もいて、とてもうれしく思います。

この詩集は、NHK記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。

とよださんの今月の掲載詩はこの『子供のピラミッド』の書名となったテーマです。読者のなかには、仕事上の出張でも、観光でも、エジプトへいらして、ピラミッドを訪れないまま帰国された方は少ないかと思います。つまり、私たちにとって、エジプトといえばすぐにピラミッドが脳裏に思い浮かぶほど、エジプトとラミッドは切り離せないものです。

観光資源が主な収入源となっているエジプトでは、ピラミッドはその中でも第一の収入源です。ロバ引きやラクダ引き、観光ガイド、物売りなどにとっては、まさに稼ぎ場所ともいえるでしょう。その割には、遺跡周辺の清掃はおざなりで、観光客とロバ引きやガイドなどとの料金をめぐる口論は日常茶飯事です。それもまた、エジプトらしい出来事で、大きな事件になることは、めったにないのです。

それでも、幼い子供を連れた両親にとっては、ロバ引きは怖い存在なのかもしれません。ハラハラドキドキのピラミッド詣ですが、ここでも子供たちの無邪気な笑顔に救われる両親でした。たぶん、とよだ家にとって、これはエジプトでの最大の出来事だったかもしれません。でも、子供たちの記憶に残ったのは「うんこつき」のピラミッド。恐怖はいつの間にか消えていたのでしょう。（塩尻和子）

こどものピラミッド

車から眺めてきた
ギザのピラミッドが
大きくなってきて
本当にエジプトにきたのだと
女学生の気分になっていた

ピラミッドの周りには
日焼けし 油染みた長衣の男たちが

そちこちに群れ
アリババと
四十人の盗賊はかくありしかと
目に留めた途端
亜理も亮介も
その男たちに横抱きにされ
ボールのようにパスされていった

客待ちのロバ 馬 らくだの所で
ロバ引きの手に渡され
それぞれロバの上に据えられた
二頭のロバは異なる方向に歩きだした
安寿と厨子王のように
“アリー” “リョウチャーン”と
距離が離れる中で呼びあっていた
喜ぶどころでないこどもたちの様子に
ロバ引きは狎れきっているのだろう
小さな円をそれぞれに描いて戻ってきた
ロバ引き二人と後ろに控えている男たちが
こどもの観光代金の請求に
親の方を囲み込んだ

放免されて やっと
クフ王のピラミッドの石にさわりながら
上を見た
頂点は見えなかった
肩丈程の石が大きくのしかかってきた
数段よじ登って下を見ると
ロバ引きたちは
関係のない顔をしていた
ピラミッドに登っている人は
客引きの洗礼を受けてしまった人
地元の人で対象外の人
そして 客引きを喝破できた人
青空の下
一段上がるごとに強くなる
風に吹かれて
家族がそれぞれ自由に動きだした
ピラミッドの科学 不思議は
さておいて 私は

子どもの顔に表情が出てきたことを喜ぶ
母親になりきっていた

その日にあったことを
子どもたちは私に話しながら
絵に描いていった
強すぎる刺激をいやし
一日をしめくくる儀式のようであった
その日
大中小の三角と こぶのあるラクダ
砂の部分に
黒いクレヨンで塊を沢山描いた
排泄物を意味したものだった

帰りながら
ピラミッドの頂点を何度も振り返って
見上げた両親とは関係なく
二歳と四歳の子どもは
足元の様々な排泄物に
『ウンコ 気をつけて！』
『ここも気をつけて！』と
声をかけあっていった

ロバ引きの恐怖の絵でなく
ウンコつきのピラミッドが
二人の子のエジプト記念